

全国学力・学習状況調査からみる 今後の学び

4月14日から17日に、小学校6年生と中学校3年生を対象に令和7年度の全国学力・学習状況調査が行われた。昨年度までは結果を1回にまとめて公表していたが、今年度は、まず7月14日に正答率・IRTバンド分布などの全国平均、次に同31日に全国データに基づく分析結果が公表され、さらに都道府県・指定都市別データに基づく分析結果を公表(秋頃)という3段階で行われる予定である。また、7月には、昨年度実施された経年変化分析調査の結果も公表された。

今回は、昨年度から方式等が大きく変わった点、そして、公表された結果のうち、算数・数学、理科で気になったところを拾いながら、これからの学びについて考えていきたい。

全国学力・学習状況調査：大きな変更点

①紙から端末へ

今年度は中学校理科が今までの紙の解答から端末解答になった。紙のPBT(Paper Based Testing)からコンピュータ使用のCBT(Computer Based Testing)へ。令和

8年度は、中学校英語がCBTで実施され、9年度から小学校・中学校とも全教科がCBTでの実施となる。

今年度の理科で次のようなことができるようになったが、現場での混乱はなかったのだろうか。

- ・動画を使用することで、実験・観察の過程を示すことができるようになった(微生物の観察、ドライアイス内でのマグネシウムの燃焼など)
- ・解答にあたって画面上で試行錯誤できる(原子・分子の結びつきの解答など)
- ・OECDが実施するPIISAと同様の形式の出題となった

②古典的テスト理論から項目反応理論に

中学校理科は「古典的テスト理論」に基づくテストから「項目反応理論(IRT(Item Response Theory))」に基づくテストになった。今までのように全員が同じ問題を解くのではなく、図1のように、実施日、解答者ごとに異なる組み合わせの問題を解くことになった。全員26問を解答するが、公開問題の

図1 中学校理科 問題の構成

	公開問題(合計22問)			非公開問題
	全日程に共通する問題(6問)	実施日により異なる問題(16問)		
1日目	1 ⑥問 (1)~(6)	2 9 ④問 (1)(2) (1)(2)	+	16問
2日目	1 ⑥問 (1)~(6)	5 8 ④問 (1)(2) (1)(2)	+	16問
3日目	1 ⑥問 (1)~(6)	3 6 ④問 (1)(2) (1)(2)	+	16問
4日目	1 ⑥問 (1)~(6)	4 7 ④問 (1)(2) (1)(2)	+	16問

生徒一人が解く問題数 ②6問

うち6問と、実施日により異なる問題を4問の計10問。非公開問題から解答者ごとに異なる問題を16問、合わせた26問。結果も「平均IRTスコア」が公表されたが、結果返却時に十分な説明がされたのだろうか。

全国学力・学習状況調査：結果概観

各教科の平均正答率(中学校理科は平均IRTスコア)は次のとおり。

(一) 内は2024年度の平均正答率

小学校国語	67・0% (67・8%)
小学校算数	58・2% (63・6%)
小学校理科	57・3% (63・4%)
中学校国語	54・6% (58・4%)
中学校数学	48・8% (53・0%)
中学校理科	50・5% (49・7%)

●理科・算数・数学の問題から

「小学校理科」磁石につくか電気が流れるか
鉄、アルミニウム、銅の3種類の金属について、それぞれ

磁石につくか／電気が流れるか

を答える問題。正答率は10・7%だった。アルミニウムは1円玉、銅は10円玉を使ってすぐに試せる問題だが、遊びや日常生活で磁石を使ったりすることが少なくなっているのは事実。

「中学校理科」微生物の観察

ゾウリムシ、ミドリムシ、ミジンコ、ミカヅキモの4種類の微生物の動画を見て、呼吸をしている微生物をすべて選ぶ問題。正答率は29・8%。ミカヅキモを入れずに解答しているのが58・9%ということから、動かない、あるいは、植物ということで呼吸をしていないと判断したと推察される。

「小学校算数」数直線上の数

数直線上で示された数を分数で書く問題。0から2までが6等分され、0から1つ目と5つ目の数直線上の数を書くのだが、正答率は35・4%。

「中学校数学」素数

1から9までの数から素数を選ぶ問題。正答率32・2%。1を素数に選んでいる解答が50・0%

どの問題も、内容的には難しい問題ではなく、先の学習につながる基本事項なので、もう少し高い正答率がほしいところ。

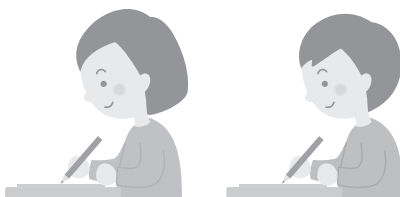
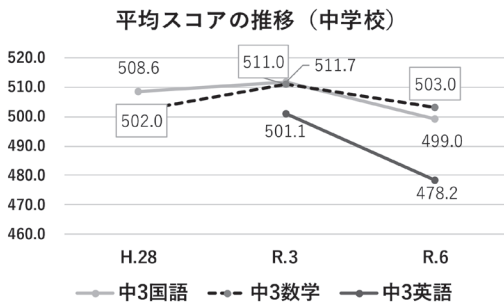
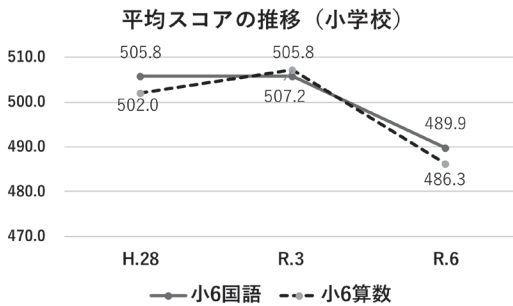
経年変化分析調査から

今年度の全国学力・学習状況調査の公表と同じタイミングで、昨年度に実施された経年変化分析調査の結果も公表された。こちらの調査は、全国的な学力の状況について、経年の変化を把握・分析し、今後の教育施策の検

証・改善に役立てる目的で行われ、平成25年、28年、令和3年度に続き、令和6年度で4回目の調査。悉皆調査ではなく、小学校6年生6万人(PBT、CBT各3万人)、中学校3年生14万人(PBT、CBT各7万人)が調査対象。

この調査では、中学校数学を除く教科で、平成28年(中学校英語は令和3年)から平均スコアが下がった(図2)。このグラフとともに「学力低下」とメディアでもかなり取りあげられたので、ご覧になった方もいらっしゃるはず。20年前、PISAの結果で日本が順位を下げ、ゆとり教育の結果だとして教育内容の見直しがはかられたことが思い出される。

図2 経年変化分析調査
平均スコアの推移



今後の学びに期待すること

今年度の全国学力・学習状況調査、そして経年変化分析調査から、正答率の低下↓基礎学力の低下が懸念され、文部科学省の担当部局からも「結果を重く受け止め、真摯に向き合って改善に取り組む」とのコメントがあり、メディアでも大きく取りあげられた。

そこで、学習状況調査の結果をからめながら、課題の一端をフォーカスしてみたいと思う。

①小学校↓中学校で教科の捉え方が変わる
「その教科が好きか、役に立つと思うか」という設問に、今年度は「得意か」が新規で加わった(図3)。国語はどの項目でも小学校↓中学校で大きな変化はない。他方で算数・数学、理科は「得意」「役に立つ」が、理科は加えて「好き」が大きく減少している。

②成績上位層も心配

「得意か」に注目すると、上位層にもかかわらず「得意でない」と回答する児童生徒が一定数いるため、正答率が高い上位層(算数・数学は上位25%のA層、理科はIRTバンド4と5)に絞り、図3の「得意かどうか」と「授業がよくわかるか」などの普段の学習活動とクロスした集計結果が図4、5。

まず、図4の中学校数学。「普段の生活の中で活用できているか」が、得意だと答えた生徒と得意ではないと答えた生徒で25ポイント近くの差がある。

図5の理科で、同様に「普段の生活の中で

図3 全体 好きか／得意か／将来役に立つと思うか

全体	国語		算数・数学		理科	
	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校
好きか	58.5%	57.9%	58.0%	54.0%	80.1%	63.9%
役に立つと思うか	90.5%	88.2%	91.6%	75.2%	79.8%	63.6%
得意か(新規)	61.6%	51.6%	60.3%	46.2%	78.4%	50.8%

図4 「算数(数学)上位層」×「得意・不得意」×「学習活動」

算数(数学)・上位層(A層)	小学校		中学校	
	得意	得意でない	得意	得意でない
算数(数学)の授業はよくわかりますか。	98.7%	74.6%	97.6%	73.6%
算数(数学)の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていますか。	84.2%	56.7%	77.9%	60.1%
算数(数学)の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できていますか。	93.6%	76.1%	74.2%	49.5%

図5 「理科上位層」×「得意・不得意」×「学習活動」

理科・上位層(IRTバンド4・5)	小学校		中学校	
	得意	得意でない	得意	得意でない
理科の授業はよくわかりますか。	98.3%	73.2%	96.1%	64.9%
自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問を持ったり問題を見出したりしていますか。	80.5%	49.2%	76.4%	52.7%
理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できていますか。	75.5%	40.9%	75.9%	50.8%

活用できているか」を見ると、小学校で35ポイント近く、中学校で25ポイント以上の差がある。

算数・数学、理科の成績上位層も、身近な事象との関連を見つけたり、活用したりすることができないと、得意だと言いきる自信につなげていかないということだろう。

今回の結果について、「勉強時間の減少」スマホ、SNSの問題」などの指摘が出てきているが、長く学び続けるためには、小学校から中学校への接続をどうするか、生活との関連で捉えられるかの2つを意識し、「得意」を増やしていくことが大事なポイントになるのではないだろうか。